

島々に息づく伝統を守った「神棚のある家」

宮城県塩竈市桂島地区・野々島地区災害公営住宅建設工事



日本三景のひとつにも数えられる宮城県の松島は、海に浮かぶ岩のような島々に、松が聳える姿が広がる松島湾の多島郡だ。その一部、湾の外洋側にかぶさるように連なる浦戸諸島は桂島・野々島・寒風沢島・朴島の4島を中心にして構成される。4島と本土を結ぶのは、対岸の塩竈港から運行される市営汽船だ。港から1日5便前後運行する定期船は、海苔養殖の竹竿の間を抜け、港を出ておよそ25分で、桂島の桟橋に到着する。

桂島で漁業を営む内海亨さんの春先の大事な仕事は、浜辺でホタテの貝殻を紐にくくり、連ねる作業だ。これを海中に沈めると、自然の種牡蠣が10以上も付着して、やがて豊穡な身を育てる。その日常を一変させたのは、2011年3月11日の東日本大震災だった。「浜辺で仕事をしていたら大変な地震が襲ってきて、私はすぐに昭和35年のチリ地震のことを思い出しました。その津波を経験していたので、東日本大震災の揺れから必ず津波が来ると思いました」身体ひとつで斜面を登りながら、



洗い場や網の干し場も作られた桂島の災害公営住宅 神棚の下で微笑むゆきいさん(右)と敬子さん



べられない。習慣だね。仏壇もあるしご近所さんもいるから、安心して過ごせ

「毎朝神棚に手を合わせてからでないとご飯を食べられない。習慣だね。仏壇もあるしご近所さんもいるから、安心して過ごせ

「私もお仕事で苦労の皆さんは『いつもお仕事で苦労入ってくれます。野々島の災害公営住宅の入居式では、島民の方豚汁やお弁当を作ってくれたり、子供たちが太鼓の演奏をしてくれました。さらに感動したのは、島の花火師の方が手配してくれた打ち上げ花火でした」

UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
[企画制作]新潮社

験。最初はどうか手がけたらいいの
か見当もつきませんでした」
松村は、島民の要望を聞き取ることから始めた。浮かび上がったきたキーワードはふたつ。「田の字型の間取り」と「神棚」だ。「廊下で家の中が分かれているのではなく、襖で隣の部屋とつながっており、開ければすぐに家族と話ができる。そして、毎朝仕事に出かける前に手を合わせることでできる神棚と、仏壇がある。その暮らしをこれからも続けていきたいということでした」

という海の災害を経験してまな
お、松島湾の海とともに生きていく漁業の島において、神棚のない住居は考えられないと島民は口を揃えた。災害公営住宅ではあまり例のないことだったが、松村は塩竈市にかけ合い、神棚のスペースが設けられることが決まった。定められた方角や、仏壇とは向かい合わせにしてはいけないという決まり事も尊重した。

島民が一体となった入居式

昭和22年に本土の松島より桂島に嫁いだ88歳の内海ゆきいさんは、いまその災害公営住宅に暮らしすひとり。同じ住宅で家族同様の付き合いをする82歳の内海敬子さんとともに「離れ島に嫁ぐことになったときは驚いたけど、住めば都で今はここ以外の暮らしは考えられない」と口を揃える。「毎朝神棚に手を合わせてからでないとご飯を食べられない。習慣だね。仏壇もあるしご近所さんもいるから、安心して過ごせ

「私も先ほど中を見せていただきましたが、木の香りのする素晴らしい住宅です。浦戸の皆さんも一致団結して、お互いに身を寄せ合っていて、昔の暮らしに一時も早く戻っていただければ」と挨拶した。URは、桂島と野々島のほかに、寒風沢島・朴島それぞれに、災害公営住宅を建設している。松村と二人三脚でこの事業を手がけた、塩竈市震災復興推進局・復興推進課・課長補佐兼住宅基盤復興係長の佐々木健治さんは言う。「今回はURさんに復興事業についてのハード面の整備の仕方から、ソフト面の考え方にいたるまで教えていただきました。URの方は使命感が高く、対外的な説明や具体的な事務に関しても優れている、お力を借りな

亭さんは家族や島のお年寄りに声をかけた。島では元気な者は身体が弱い人を軽トラに任せ、皆で上へ上へと避難していった。およそ1時間後に島を襲った津波はひとりの死者も出さなかった。亭さんの妻の内海せつ子さんが話す。「この島では、牡蠣やタラの芽、ふきなどが余ったら隣にお裾分けしたり、一人暮らしの人の家を『大丈夫ねー?』と声かけするのが普通なんです。いつも助け合っているから、津波の時も皆で逃げられたんですね」
だが、内海さん夫妻の家は跡形もなく流された。翌日、亭さんが浜辺に足を運ぶと、目に飛び込んできたのは海に浮かぶ家々の残骸だった。そして、海の中に沈めていた種牡蠣は、ほとんどが流されていた。

海と共生する島民の心の支え

「廃校での避難所生活、仮設住宅での暮らしを経て、島の高台に災害公営住宅が完成し、入居がかなったのは2015年の3月のことである。基本計画の策定から設計・建設までを手がけたのが、UR都市機構だ。
「島の伝統を守りながら、素晴らしい住宅を作ってくれたURさんには、本当に満足しています」と糸蔵区長は話す。その事業を一貫して手がけたのは、UR都市機構宮城・福島震災復興支援本部・住宅整備部・住宅計画チームの松村尚だ。松村はこう話す。「昔ながらの集落コミュニティが今も残る桂島の人々には、大事にしている生活スタイルがあります。さらに、URにとって島に住宅を作るといのは初めての経

